



幼児に聽
かせる噺

赤い瓶 青い瓶

東京女高師教諭 水谷 年 惠

お山の中の大きなお寺へ、或晚一人の泥棒がは
いりました。お寺には昔々から大切にしてある寶
物がありました。其の寶物と云ふのは、赤い瓶と
青い瓶で、二つとも蓋がしつかりしてあつて、中
に何が這入つてゐるか、誰も知つてゐる者はあり
ませんでした。泥棒は其の二つの瓶を見付け出し
て、

「此の中にはきつといふ物が一ぱい這入つてゐる
にちがひない。」

と思ひまして、二つの瓶を盗み出すことにしまし
た。

赤い瓶も青い瓶も大層大きいので、二つ一度に
盗み出すことは出来ません。それで先づ赤い方の
瓶を、えんやらやつと抱へあげて、えつちらおつ
ちら、お山の麓まで持つて來ました。お山の麓に
は石のお地藏様が、小さなお堂の中に頭巾をかぶ
つて杖を持つて立つていらつしやいます。泥棒は
其お地藏様の前へ赤い瓶をやつこらさとおいて、

「お地藏様、も一度お寺まで行つて來ますから、
此の瓶をお預り下さい。ちやんと番をしてゐて
下さいよ。」

と言つて、又すたこらお山の中のお寺へ引返して

行きました。そして今度は青い方の瓶を盗み出し、これもえつちらおつちらお山の麓のお地藏様の前まで運んで来ました。

「お地藏様有難う。よへくをしてゐて下さいましたね。さあ赤い瓶に青い瓶、まんまと盗んだ二つの瓶、中にはどんないゝ物がいっつてゐるだらう。金かしら、銀かしら、それともダイヤモンドかしら。何にしても中の寶はみんな私の物だ。」

と嬉しがつて、先づ青い瓶に手をかけて、其の蓋をあけようとしました。すると、泥棒の手が急に両方とも、ひどくしびれて動かなくなつてしまいました。

「あついた……………。おゝいたた……………。あゝいた。おゝいた。」

と言つて、泥棒は泣出しました。するとお地藏様が、

「これ泥棒、なほしてやるから此處へお出で。」とおつしやいました。泥棒は喜んで、

「はいく。お地藏様、どうぞ直して下さいませ。」と言つてお地藏様のそばへ行きました。お地藏様は持つていらつしやる杖で泥棒の左の手をぼんぼん、右の手をぼんぼん、どちらも二度づつおたゝきになりました。さうすると、今までひどくしびれてゐた泥棒の手は、すぐ様なほつて元の通りの手になりました。泥棒は、

「有難うく。おかげで助かりました。青い瓶はひどい瓶だ。もうこりくだ。今度は赤い瓶をあけて見やう。」

と言つて、赤い瓶の蓋に手をかけました。そして「一二の三。」と力を入れて蓋を取らうとすると、又両方の手がびりくつとしびれてしまひました。前よりもつとくひどくしびれました。泥棒は「うーん、く。」となつて地べたへころがつて

しまひました。ころがりながら、

「お地藏様、もういたしませんからどうかも一度
なほして下さい。お地藏様、お願ひです。お願
ひです。」

と言つて頼みました。お地藏様は可哀相に思つて、
「ではも一度だけなほしてやらう。」

とおつしやつて、泥棒の兩方の手を杖でおたゝき
になりました。

泥棒は手がなほると、一目散に逃出して何處か
へ行つてしまひました。泥棒がゐなくなると、赤
い瓶と青い瓶とは大きな聲を出して、

「あつはつは……………」

「あつはつは……………」

と笑ひました。お地藏様も、あつはつは……………」
とお笑ひになりました。赤い瓶が、

「青君、こんなひろくした處へ来ていゝ氣持だ
ね、どうだい、一つ駈つこでもしようぢやない

か。」

と言ふと、青い瓶が、

「それは面白い。さあしよう。だが審判官がゐな
くちやだめだ。」

赤「うまいことがある。お地藏様に頼まう。お
地藏様、どうか審判官になつて下さい。」

お地藏様もにこ／＼笑つて、

「よし／＼。わしが審判官になつてやる。では此
のお山の周りを廻りつこしてごらん。赤は右の
方へ駈け出すんだよ。青は左の方へお駈け。い
／＼かい。早く私のところへ歸つて來た方が勝だ
よ。」

赤・青「面白い／＼。さあはじめよう。」

地藏「よをーい、どん。」

ころ／＼／＼／＼、ころ／＼／＼／＼、お山の
麓を赤い瓶は右の方へ、青い瓶は左の方へころが
り出しました。赤もころ／＼／＼、青もころ／＼

く、青い瓶も一生懸命、赤い瓶も一生懸命、どちらも一生懸命で、ころくくく、ころくくくとお山の周りをころがつていきます。

あつちもころくく、こつちもころくく、ころくくくくころがつて、お山の後の方で出あひました。赤い瓶はこつちへころくくく、青い瓶はあつちへころくくく、ころくくくくと近よつて、ころくくびちやんとぶつかつてしまひました。

其のぶつかりやうがあまりひどかつたので、お山がぐらくつとゆすぶれました。其の拍子に、お山の前の前ではお地藏様がたまげてころげておしまひになりました。お山の中の兎も狸も鹿も牛もびつくりして飛上つてしまひました。鳩も四十雀も七面鳥も目白も驚いて目をまはしてしまひました。

「あーつ、大地震だ、大地震だあーつ。」

「やーあ、大雷だ、雷が百も一ぺんに落ちたんだ

あーつ。」

「こはいようー。」 「いやだよー。」

牛も鹿も狸も兎も「もうく、ひゆうく。」と泣き出してしまひました。鳩も四十雀も七面鳥も目白も「くうく、ちいく」とふるへ出してしまひました。其處へ狐がやつて来て、

「やあみんな泣いてるく。おいく、そんなに泣いてゐたつて仕方がないぢやあないか。今のは何だつたか、麓のお地藏様のところへ行つてきいて見ようよ。さあみんな来いく。」

と言つて先に立ちました。すると、兎も狸も鹿も牛も、鳩も四十雀も七面鳥も目白も、みんな元氣を出して狐の後からぞろくくつついて、麓のお地藏様のところへいきました。

お地藏様のところへ行つてみると、お地藏様は前の方へつんのめつてころがつていらつしやいます。みんなは、

「ひやあー。お地藏様がころんでいらつしやる。さあみんなで起してあげよう。」

と言つて、「よいとこせつ。」とお地藏様を起して、

「お地藏様、お怪我はございませんか。」

とうかゞつて見ました。泥だらけの顔をしてお地

藏様は、

「みんなよう来てくれた。やれぐれひどい目にあつた。どこにも怪我はしないが、頬ぺたも鼻の

先もいたい。」

狐「それはくお可哀相に。ところでお地藏様さつきとえらい音がしましたが、あれは一體何でございますか。」

地藏「あれかね、あれは赤い瓶と青い瓶が此のお山を廻りつこして、びちやんとぶつかつた音だよ。」

これをきいて、兎も狸も鹿も牛も、鳩も四十雀も七面鳥も目白も二度びつくりしてしまひました。

なせかといふと、赤い瓶と青い瓶はお山のお寺の大じの大じの寶物で、一寸でもさはつたらすぐばちのあたる瓶だからです。

狐「あの赤い瓶と青い瓶にはお金が一ぱいはいつてゐるんだよ。」

兎「お金ちやあない。赤い瓶には赤鬼が這入つてゐて、青い瓶には青鬼が這入つてゐるんだよ。」

七面鳥「ちがふよ。赤い瓶の中には赤い小さい瓶が千も萬もはいつてゐるんだよ。それから青い瓶の中には青い小さい瓶が千も萬もはいつてゐるんだよ。」

牛「みんなうそだ、あの赤い瓶には赤いお酒、青い瓶には青いお酒がはつてゐるんだ。うまいくお酒で飲むと誰でも體が金になつてしまふんだせ。僕が飲めば金の牛になるんだ、狸君が飲めば金の狸になるんだ。お地藏様が召上れば

金のお地藏様になるのだよ。」

みんながめい／＼違つた事を言ひます。どれが本當だかわかりません。それでお地藏様が口を出し
た。

「みんなそんな事を言つてゐないで、お山の後の方へいつて赤い瓶と青い瓶がどんなになつてゐるか見て來たらい／＼ぢやあないか。」とおつしやいました。みんなは、
「さうだ／＼、それがい／＼。」

虹の橋

野口雨情

あつちの町と

こつちの町と

太鼓橋たいこはしかけた。

赤い草履ぞんぜはいて

みんなでわならう。

と言つて、又ぞろ／＼連立つてお山の後の方へ行

きました。お山の後の方へ行つてさがして見ましたが、赤い瓶も青い瓶も見つかりません。お山の周りを一廻りしましたが影も形も見えません。ぐる／＼ぐる／＼何度も廻つてさがして見ましたけれども赤い瓶も青い瓶も何處へ行つたのかわかりませんでした。お地藏様にきいて見ても御存じない。さて赤い瓶と青い瓶はどうなつたのでせう。

あの子もわたれ

この子もわたれ

仲よくわたれ。

虹にじの橋高いぞ

手々ひいてわたれ